

福井豪雨から10年を契機とした水防災の取組

寺田 哲也

近畿地方整備局 福井河川国道事務所 調査第一課 (〒918-8015 福井市花堂南2-14-7)

平成16年7月に福井県に大きな災害をもたらした福井豪雨から10年が経過した。全国で自然災害が後をたたない中、この10年目という年を契機に県民一人ひとりが自然災害の怖さを再認識するとともに、福井豪雨から得た教訓を忘れること無く、災害が起こった場合にどう行動するかを考える機会となるよう福井県内の行政機関が協同して組織した「福井豪雨から10年 ふくいの水防災を考える会」が、水害に対しての防災・減災への意識を喚起するために行った取組内容を紹介する。

キーワード 広報、防災

1. 福井豪雨の概要

平成16年7月に発生した福井豪雨は未曾有の局地的な短時間豪雨となり、福井県内各所において河川の越水や決壊による甚大な被害が発生した。

日本海から北陸地方（福井県）に延びる梅雨前線が活性化し、強い雨雲が福井県嶺北地方に流れ込み、18日の0時過ぎから各所で激しい雨を観測し始め、特に明け方から昼前にかけては嶺北北部を中心に1時間に80mm以上の猛烈な雨を観測した。18日昼頃からは、雨は小康状態となり、降り始め（17日15時）からの総降水量は、嶺北北部の福井市美山町では285mmに達した。

足羽川では、流下能力を大きく上回る洪水が発生し、市内中心部の左岸堤防が決壊したことにより福井市街地が甚大な被害を受けた。（写真-1）

また、山間部ではがけ崩れや土石流等の発生により、多大な被害を受けた。

福井豪雨により5名の死者・行方不明者が出たほか、建物約200棟が全半壊、1万3600棟以上が床上・床下浸水するなどの甚大な被害が生じた。



写真-1 足羽川決壊地点（福井市春日1丁目）

2. 水防災を考える会の立ち上げ

福井豪雨発生後、近畿地方整備局と福井県では、再度の災害発生を防止するため緊急的に河川の整備を行う河川激甚災害対策特別緊急事業として、堤防が決壊した足羽川と、足羽川からの洪水を安全に流せるように日野川において緊急的に河川改修を実施した。上流では足羽川ダムが現在建設中であり、完成すると福井豪雨と同程度の規模の大雨がきても、安全に洪水を流下させることができるようになる。

こうした河川事業が進み、水害に対する安全度が向上していく中、甚大な被害をもたらした福井豪雨から10年が経過し、当時の災害の記憶も過去の出来事になりつつある。

一方、福井豪雨後も全国的に見ると近年の気象変動に伴い発生する豪雨による被害が後を絶たない。昨年は、広島市や福知山市で発生した集中豪雨により土砂災害や内水氾濫等の大きな被害が発生している。福井県内でも平成25年に発生した台風18号は嶺南地方を中心に大きな被害をもたらすなど、自然災害はいつ発生してもおかしくない状況にある。

県民一人ひとりが自然災害の怖さを再認識するとともに、福井豪雨から得た教訓を忘れることなく、その経験から学んだことをこれからの防災対策に生かさなければならぬ。現在の子供達は、福井豪雨を経験していないが、これからもこの地域で営みを続ける限り福井豪雨を伝承し、防災に対する意識を持ち備えておくことが必要である。

こうした中、福井豪雨から10年となる平成26年、水害に対する防災・減災に関する意識を喚起しようと福井県内の自治体に呼びかけ、平成26年6月に「福井豪雨から10年 ふくいの水防災を考える会」（以下、「水防災を

考える会」に略称)を組織した。

【ふくいの水防災を考える会 構成団体】
国道交通省近畿地方整備局、福井地方気象台、福井県、福井市、鯖江市、あわら市、小浜市、坂井市、若狭町、池田町

3.水防災を考える会の取組

「水防災を考える会」は定期的に会議を開催し、防災・減災への意識が喚起できる一貫性をもった効果的な広報について意見を出し合い企画した。

「水防災を考える会」が平成26年に取り組んだ広報活動は次のとおり。

1. キックオフシンポジウムの開催
2. 巡回パネル展の開催
3. 防災補助教材の作成
4. わが家のぼうさいコンテストの開催
5. 総括シンポジウムの開催

事業展開として、一連の広報活動の皮切りとしてキックオフのシンポジウムを開催し、その後各広報事業を実施、その締めくくりとして総括的なシンポジウムを開催することとした。

また、福井新聞社やNHK福井放送局といった報道機関も事業に参加することで、新聞やテレビ等といった報道媒体を活用し、県内への広報を広く周知することが可能となった。

以下に、水防災を考える会が取り組んだそれぞれの活動内容を紹介する。

①キックオフシンポジウムの開催

6月に水防災を考える会を立ち上げ、これから取り組む活動の皮切りとして「県民公開シンポジウム 問い直そう、福井豪雨の教訓～あれから10年」を7月に開催した。(水防災を考える会は共催として参加)

パネルディスカッションや福井豪雨の記録上映、福井豪雨のパネル展を実施した。パネルディスカッションでは防災の専門家や地域住民からの代表を交え、「命を守るための避難」をテーマに福井豪雨当時の気象状況や被害状況を振り返り、避難についての課題や平成25年に発生した伊豆大島での災害を踏まえ情報伝達や大雨特別警報、避難に関する制度等について活発な討論が行われた。(写真-2)

<キックオフシンポジウム>

開催日：平成26年7月19日(土)

場 所：福井県県民ホール

パネルディスカッション(命を守るための避難)

牛山 素行(静岡大学防災総合センター 教授)

柿下 毅(福井地方気象台 台長)

竹内 成和(福井県 土木部技幹)

飛田 幸平(福井市 危機管理対策監)

住民代表者 3名

※ ()内の役職はシンポジウム開催時点



写真-2 パネルディスカッション

②巡回パネル展

福井豪雨での足羽川左岸の決壊と住宅街への浸水、JRの鉄橋流失、土砂崩れによる被害、又、平成25年台風18号による嶺南地方の堤防決壊や浸水した生々しい被災状況のパネルを作成。また、その後の復旧への道のりや河川改修、ダムの効果についてもパネル展示を行い、普段あまり目に触れることのない事業への理解を求めた。

県内12箇所まで延べ82日間展示会を実施し、広く防災意識の啓発を行った。親子連れや子供を意識し、多くの人が集まる図書館などの公共施設の他、イベント会場でも開催した。(写真-3)シンポジウムや県庁で開催したパネル展では、水害の怖さが伝わりやすい福井豪雨の映像もスクリーンで上映した。



写真-3 パネル展の様子

③防災補助教材

小学生向けに写真やイラストを多くとり入れた防災に関する補助教材を7月に発行した。福井豪雨や平成25年の台風18号の被害状況などより身近な事例を織り交ぜながら紹介することで自然災害はいつ自分の周りで起こってもおかしくないことを注意喚起し、「水害」「土砂災害」「地震」「津波」「竜巻」に分けて、対応策を分かりやすく解説した。また、避難のあり方を家族で話し合う重要性やハザードマップについても盛り込んだ。(写真-4) 県内の全小学校や図書館に配布した他、実施しているイベントや出前講座での活用を促進。小学校等からは、合計で約2000部の追加配布の要望を受けるなど、一定の効果を上げた。



写真-4 防災補助教材「災害から命を守る」

④わが家のぼうさいコンテスト

家族で「考え、行動し、確認する」ことで災害への意識を高めてもらうことを目的に、「家族でかくにん！わが家の防災コンテスト」を開催した。子供と一緒に家族が災害時の約束事を決めるために地域と一緒に探検し、身近にある危険な場所や安全な場所を確認、それを防災マップという形の作品として募集した。(写真-5) 今回コンテストを実施するにあたってのコンセプトは次の4つ。

1. 各家庭にある市町から配布されたハザードマップを見て、自宅、学校、職場などが水害でどのような被害の可能性がある場所なのかを確認する。
2. 被害の可能性があるのなら、避難が必要なのか、避難場所はどこなのかを確認する。
3. いつ起こるか分からない災害に家族でどう行動するのか事前に決めておく。
4. ハザードマップからだけでなく、家族や地域の人から過去の災害の体験を伝承する。

県内の自治体はハザードマップを発行しているが、どれだけの人が認知し、理解しているかは定かではない。まずは、ハザードマップを再認識し、自分の住む家や学校などがどのような危険があるかを確認することからは

じめた。そして、親や近所の人と福井豪雨や防災の事について話し合うことでつながりができ、応募者一人だけの防災力向上だけでなく、家族や地域ぐるみによる防災力の向上に繋がることを期待したものである。

6月下旬から教育委員会を通じて県内小学校に募集をかけ始め、5市町14小学校から95点の応募があり、9月16日に審査会を実施。▽子供の目線に沿った防災▽家族みんなで考えた作品▽身の回りを考えた作品▽家族が実際に行動した経験に基づく作品▽作り方の工夫を審査基準として最優秀賞、優秀賞2、NHK福井放送局長賞、福井新聞社長賞、入選10、奨励賞22の入賞37点を選考した。(写真-6)

【審査員】

- 委員長 福原 輝幸 (福井大学大学院教授)
 - 委員 青野 正志 (福井河川国道事務所長)
 - 柿下 毅 (福井地方気象台長)
 - 竹内 成和 (福井県土木部技幹)
 - 飛田 幸平 (福井市危機管理対策監)
 - 秋山 光智 (NHK福井放送局長)
 - 山本 道隆 (福井新聞社取締役営業局長)
- ※ () 内の役職は審査会開催時点



写真-5 募集ちらし



写真-6 最優秀賞作品

後で紹介する総括シンポジウムでは、表彰式及び入賞作品パネル展を合わせて開催した。入賞作品パネル展については、シンポジウム後にも県内の公共施設で実施。又、入選37作品については、福井新聞で大きく掲載されるなど、コンテストの取組を含め、水防災を考える会の防災意識の啓発活動を広く周知できた考えられる。

(写真-7)

<応募した子供達の声>

- ・ 地区の危険な場所を知っていたわけではないので、とてもよい経験になった
- ・ 家族で決まり事などを話し合っていくことで、家族の絆をよりいっそう深めることができた

<保護者からの声>

- ・豪雨の怖さを忘れかけていた。日頃の備えの重要性を再認識した。



写真-7 防災コンテストの新聞掲載

⑤総括シンポジウム

異常気象による豪雨災害や土砂災害が近年頻発し、犠牲者が後を絶たない中、ハード・ソフト面の整備を両輪として「災害に強い地域」づくりをテーマとして、「県民公開シンポジウム～災害に強い地域を目指して～」を10月11日（土）に開催。7月のキックオフシンポジウムでは地域の方も含め7人の多彩なパネリストを招き福井豪雨を教訓に「避難」を中心に討論したのに対して、総括シンポジウムでは専門家を中心にパネリストを4人に絞り、災害全般にテーマを拡大し、「防災力向上」を実現する方向性を模索した。パネリストからは、近年の豪雨災害を例に集中豪雨における大量の土砂・流木の流出による土砂災害のメカニズムに触れ、山林の流木化を防ぐ対策の重要性を言及するとともに過去に災害にあった地域の防災への取組事例を紹介し共助の重要性等を訴えた。また、水害対策を平時から思い描いておくことが重要として、「タイムライン事前行動計画」について説明。「避難」についても、避難所に行くだけが「避難」ではなく、場合によっては自宅などの2階や堅牢な部屋に移動するもの「避難」の一つとして理解を求めた。

ハード面の整備だけでは万全でないが、ソフト面の対策と組み合わせ、自助・共助・公助で補いあっていくことが重要として締めくくり、今回のシンポジウムではパネリスト数を絞ったこともあり、聴講者からは「パネリストの役割がはっきりして分かりやすい内容だった」などの声が聞かれた。(写真-8)

総括シンポジウムでは、上述で紹介した「わが家のぼうさいコンテスト」の表彰式や作品パネル展、又、福井豪雨の動画や写真を集めた「福井豪雨映像アーカイブス」を会場のスクリーンで上映した。(写真-9)

<総括シンポジウム>

開催日：平成26年10月11日（土）

場 所：福井商工会議所

パネルディスカッション（災害に強い地域を目指して）

角 哲也（京都大学防災研究所水資源環境研究センター教授）

柄谷 友香（名城大学都市情報学部准教授）

東村 新一（福井市長）

森久保 司（福井河川国道事務所長）

※ () 内の役職はシンポジウム開催時点



写真-8 パネルディスカッション



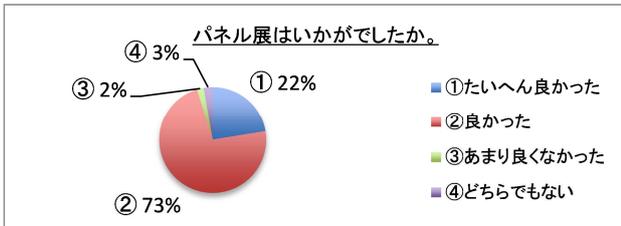
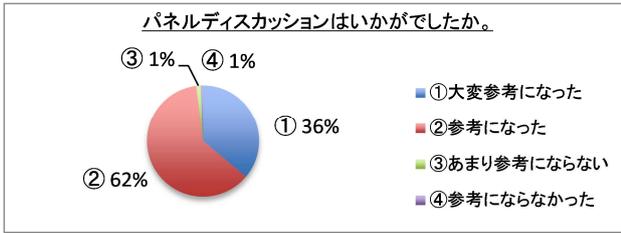
写真-9 防災コンテストの表彰式

4.広報の効果と課題について

福井豪雨から10年を契機にした取組を広報するにあたって今回の広報で特徴的だった事が2点ある。まず1点目が「水防災を考える会」を組織したことである。行政機関がばらばらに啓発事業をするのではなく、組織的・一体的に取り組むことで、より統一性のある活動を展開でき、住民に対して分かりやすく情報を伝えることができた考える。また、行政が一丸となって取り組んだことで、水防災の啓発活動の重要性がより伝わったのではないかと考えている。2点目に報道機関と連携して実施したことである。福井新聞社とNHK福井放送局が協同で参加したことで、テレビや新聞等の媒体を使って、シンポジウムや防災コンテストの事前告知や実施内容等を県民に広く周知することができた。

今回、一連の広報の取組の効果の検証として総括シンポジウムに参加された方々に行ったアンケートを実施した。パネルディスカッション、福井豪雨記録上映、パネ

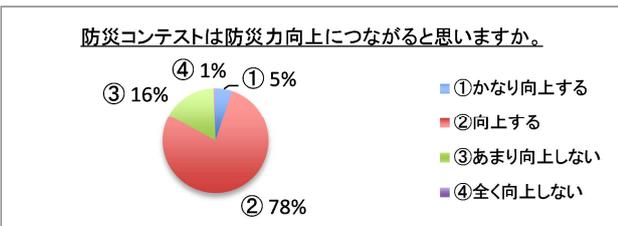
ル展の企画について約9割の方が参考になった、良かったと回答し、防災について考える良い機会として、一定の成果があったと考えられる。(グラフ-1)



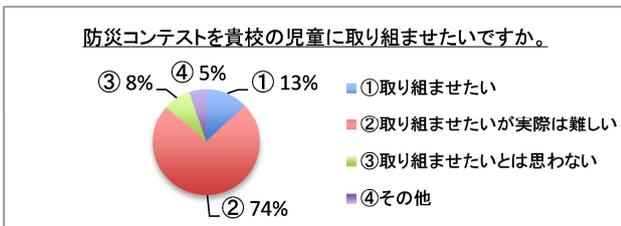
グラフ-1 総括シンポジウムのアンケート

また、平成27年に入り一連の啓発活動が完了した後「わが家のぼうさいコンテスト」について、県内の小学校を対象にアンケートを実施した。

まず、水防災を考える会が啓発活動を行っていたことを知っているかに対するの問に対し、「よく知っている・知っている」が約7割を占め、一連の活動が広く認知されていたことが分かる。防災コンテストに対しては、防災力向上に繋がるとの回答が約8割を占め(グラフ-2)、今回の取組が評価された一方、学校として今後取組ませたいかの問に対しては、「取組ませたいが実際は難しいという」回答が約7割に上る結果となった。(グラフ-3)



グラフ-2 防災コンテストのアンケート①



グラフ-3 防災コンテストのアンケート②

その理由として、「先生方の取り組む時間の確保が難しい」「他にもコンテストの依頼や課題があり必須は難しい」といった、現在の学校での教育現場での多忙な状

況が浮き彫りになった結果であった。また、アンケートの意見には、「継続的な啓発活動が必要」などの意見も数多くあり、一過性に終わらない継続的な取り組みが求められていることも分かった。こうしたアンケート結果も踏まえ、今回の取組が課題がありつつも一定の成果があり、こうした活動を継続して行くことを話し合い、今後の取組について議論し実施していくことを確認した。

6.おわりに

福井豪雨から10年が経過したが、全国を見ると異常な豪雨は頻繁に発生しており洪水や土砂災害による被害は後を絶たない。

いつ発生するか分からない災害に対して、防災に関する意識を平日頃から頭の片隅におき、いざというときに行動できる備えが必要である。

福井県においても、第2の福井豪雨がいつ発生してもおかしくない状況である。福井豪雨を忘れずその経験を生かすこと、また福井豪雨を知らない子供達に伝承していくことが重要である。

今回、こうした災害への備えとして福井豪雨から10年となる年を契機にそのきっかけになればと考え行政機関や報道機関が連携しながら事業を進めた。シンポジウム、パネル展、防災コンテスト等の活動に多くの方に参加して頂いたことに深く感謝すると共に、今回の一連の取組を評価して頂いたことは大きな成果だと考えている。

これを機に少しでも多くの方に日頃から防災への意識を持って頂き、災害時における行動や備えに役立て、安全・安心に繋がることを期待すると共に、我々も今回の取組を福井豪雨10年の取組として一過性で終わらせることなく、住民一人一人が水防災を考える契機となるよう継続的に続けたいと考える。

参考資料

「平成16年7月福井豪雨災害誌（福井県土木部）」